

令和3年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－8号)

農林総合研究センター
令和3年7月19日調査

気象経過

<平年対比>

【平均気温】

- ・7月第2半旬は、金沢、輪島ともに並 (平年差：金沢±0.0℃、輪島+0.4℃)
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともに高い (平年差：金沢+1.1℃、輪島+1.1℃)

【日照時間】

- ・7月第2半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない (平年比：金沢 16%、輪島 6%)
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともに多い (平年比：金沢 130%、輪島 125%)

【降水量】

- ・7月第2半旬は、金沢、輪島ともに多い (平年比：金沢 155%、輪島 114%)
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともかなり少ない (平年比：金沢 11%、輪島 36%)

【1ヶ月予報】

7月15日発表の1ヶ月予報(7月17日～8月16日)では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は少ない確率40%、日照時間は多い確率40%です。

週別の気温は、1週目は平年並または高い確率ともに40%、2週目は平年並の確率50%、3～4週目は高い確率40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期予想

ゆめみづほは平年に比べ並～3日早く、前年並。加賀地域では既に出穂期となっており、能登地域では出穂始期となっている。

能登ひかりは近年に比べ1～2日早く、前年並。

コシヒカリは、加賀地域では平年並で、前年並～1日遅く、能登地域では平年に比べ並～2日早く、前年並と見込まれる。

ひやくまん穀は、加賀地域で近年に比べ2～3日遅く、前年並、能登地域は近年並で前年に比べ1日遅いと見込まれる。

ゆめみづほ	加賀：	7月15日	～	7月19日	平年に比べ並～3日程度早い
	能登：	7月20日	頃		平年に比べ2日程度早い
能登ひかり	能登：	7月21日	～	7月23日	近年に比べ1～2日程度早い
コシヒカリ	加賀：	7月27日	～	7月31日	平年並
	能登：	7月29日	～	8月3日	平年に比べ並～2日早い
ひやくまん穀	加賀：	8月4日	～	8月8日	近年に比べ2～3日遅い
	能登：	8月8日	～	8月10日	近年に比べ並

2. 草丈

ゆめみづほは平年比108% (加賀地域107%、能登地域108%) でやや長い。

コシヒカリは平年比105% (加賀地域104%、能登地域107%) でやや長い。

ひやくまん穀は近年比109% (加賀地域110%、能登地域108%) でやや長い。

3. m²当たり茎数

ゆめみづほは平年比111% (加賀地域111%、能登地域109%) でやや多い。

コシヒカリは平年比101% (加賀地域106%、能登地域94%) で並。

ひやくまん穀は近年比102% (加賀地域94%、能登地域111%) で並。

m²当たり茎数（平年、前年）及び株当たり茎数

コシヒカリ	県平均	433本	（平年比 101%	前年比 102%）	24.4	本/株
	加賀	445本	（平年比 106%	前年比 109%）	25.1	本/株
	能登	416本	（平年比 94%	前年比 93%）	23.5	本/株
ゆめみづほ	県平均	548本	（平年比 111%	前年比 112%）	30.1	本/株
	加賀	552本	（平年比 111%	前年比 106%）	30.2	本/株
	能登	537本	（平年比 109%	前年比 124%）	29.6	本/株
ひやくまん穀	県平均	446本	（近年比 102%	前年比 100%）	23.7	本/株
	加賀	397本	（近年比 94%	前年比 96%）	21.2	本/株
	能登	507本	（近年比 111%	前年比 104%）	26.7	本/株

4. 葉色

コシヒカリは前回調査時から変わらず、4.1（葉色板値）と平年に比べ+0.1、前年に比べ±0.0となっている。

ひやくまん穀は、前回調査時から変わらず、4.4（葉色板値）と近年並に比べ+0.2、前年に比べ+0.1となっている。

【病害虫の発生状況】

- 雑草地における斑点米カメムシ類の発生
すくい取り調査による成虫数が6.1頭（平年値：6.9頭）で平年及び近年並みに多い。特に、大型で飛翔性のホソハリカメムシやクモヘリカメムシが多い。
（令和3年7月8日【病害虫発生予察 注意報第1号】）
- いもち病、紋枯病の発生が散見されている。
- イナゴの食害が散見されている。

当面の対策

- 早生は既に出穂期を迎えており、中生、晩生は今後出穂期を迎えることから、**飽水状態を保つ。**
- 穂肥
 - 分施肥体系のコシヒカリ及びひやくまん穀の2回目の穂肥は、地域の基準量を目安に適切に施用する。適期を逸しないように稲体をよく観察し、遅くとも葉耳間長+2～3cm（出穂7日前）までに終了する。
 - 全量基肥体系のコシヒカリ及びひやくまん穀に上乘せ追肥を行う際は、地域の基準量を目安に出穂10日～7日前（葉耳間長±0～+2～3cm）までに施用する。
- 病害虫防除
 - いもち病**
 - 蔓延を防止するため、圃場の巡回を強化し、葉いもちの発生を確認したら直ちにフェリムゾン・フサライド剤で防除を行う。
 - 圃場巡回は常発地、中山間地、川の近く等葉面の湿潤時間が長くなる地点を重点的に見回る
 - 予防剤を散布していない圃場、予防剤を散布してあってもいもち病に弱い品種には十分留意し、発生が無いか確認する
 - 農薬の使用回数に注意して防除を行う（フェリムゾンを含む農薬の使用回数は2回以内、フサライドを含む農薬の使用回数は3回まで）
 - 穂いもちの発生を防止するため、**出穂前後の基幹防除は適期を逃さず**実施する。
 - 紋枯病
 - 発生が確認されており、常発地や前年発生ほ場、茎数の多いほ場では発生に注意し、防除を徹底する。
 - 薬剤によって散布適期が異なるので、使用薬剤の基準に従う。
- 稲こうじ病の防除については、出穂前15～10日に実施する。

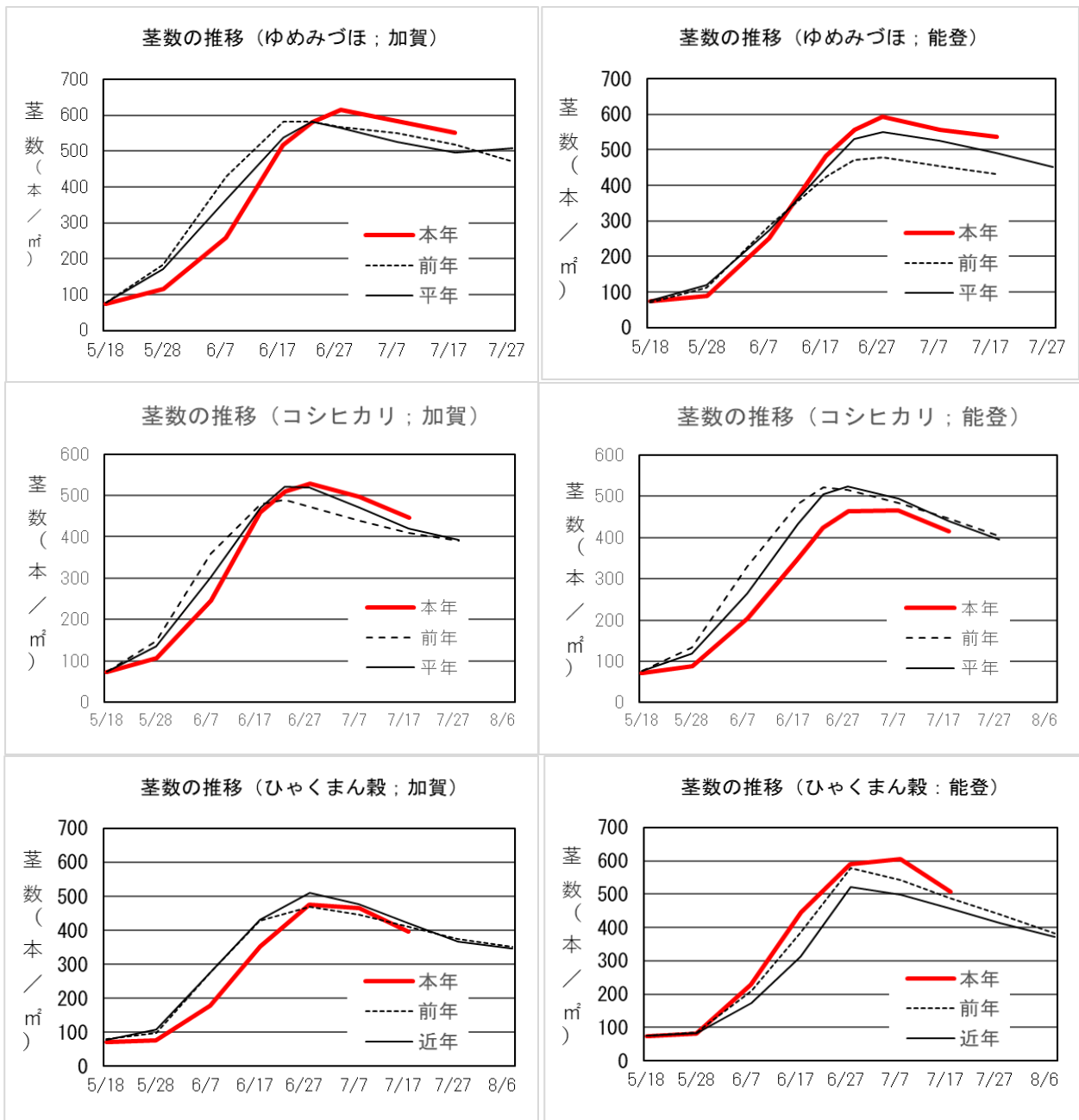
(4) **斑点米カメムシ類**

- ① 今後の畦畔や農道の除草はカメムシ類の本田侵入を助長するので、やむを得ず除草をする場合は、本田防除の直前に行う。
- ② **本田カメムシ防除：出穂後7～10日と14～17日の2回の防除を徹底する。**

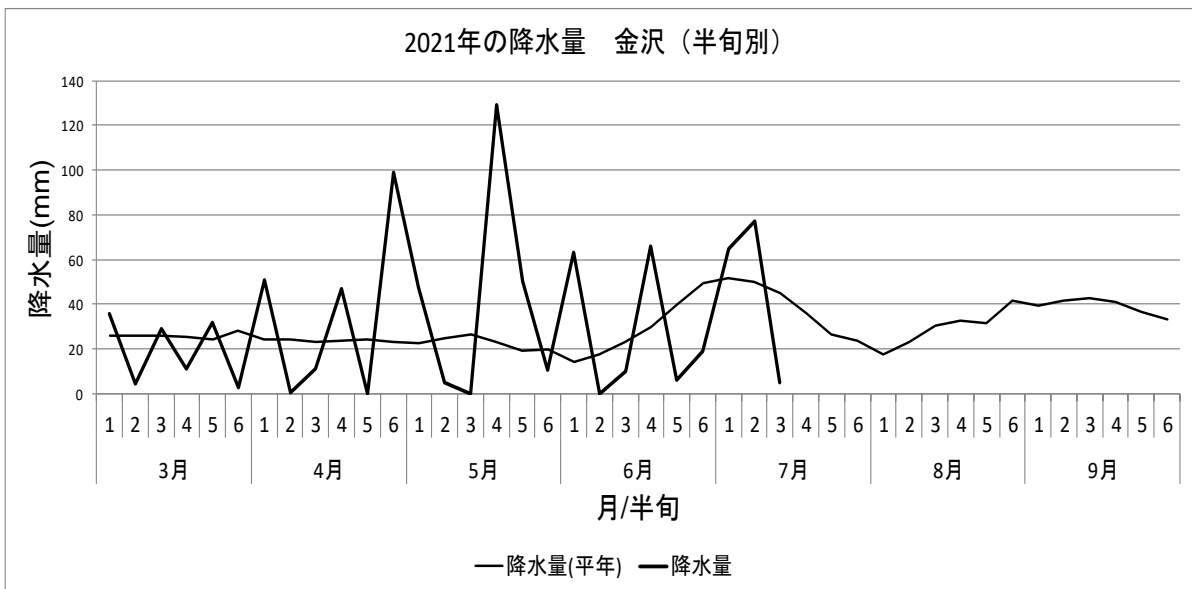
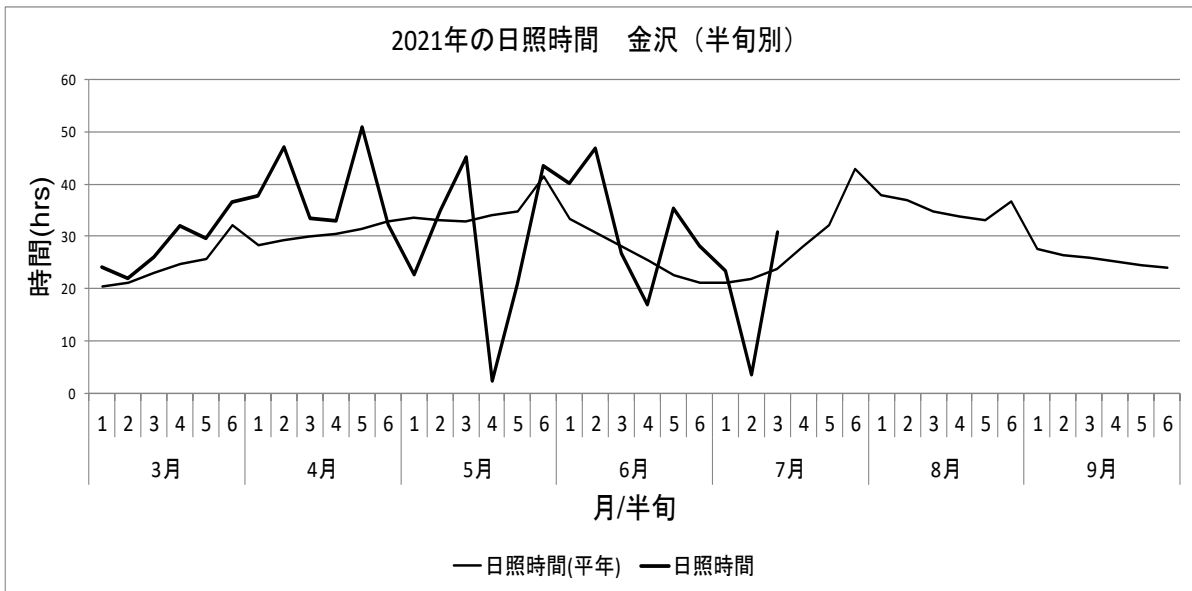
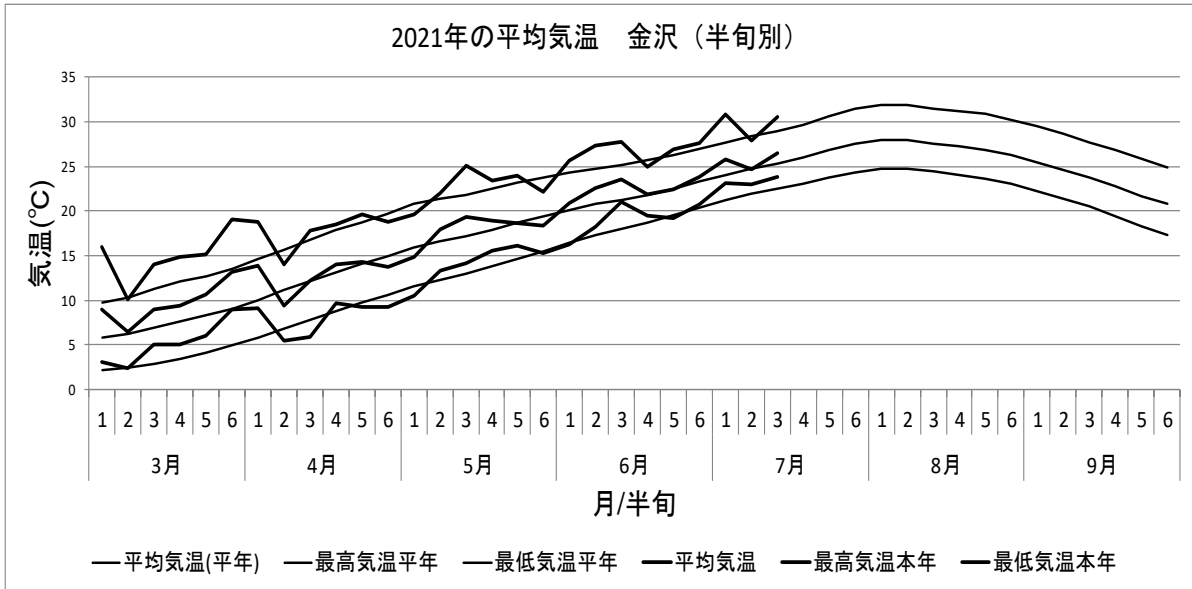
4. 出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り3日前まで行う。特に、登熟初中期（出穂後6～20日頃）に高温と水分不足が重なると、白未熟粒・胴割粒の発生を助長するので通水を徹底する。

<参考：地域別茎数の推移>

・ゆめみづほの現在の茎数は、平年及び前年に比べやや多い。コシヒカリは平年及び前年並。ひやくまん穀は近年及び前年並。ゆめみづほは目標穂数の490本/m²を上回る見込みである。コシヒカリは加賀地域で目標穂数を確保できる見込みであるが、能登地域では目標穂数390本/m²を下回る見込みである。ひやくまん穀は目標穂数360本/m²を確保、一部では下回る見込みである。



気象経過グラフ (金沢気象台)



気象経過グラフ（金沢気象台）

